

「～てほしい」と格助詞

A Note on *Tehoshii*

山西 正子
Masako YAMANISHI

Abstract

In modern Japanese, *Shite-moraitai* and *Shite-hoshii* are generally used to express a speaker's desire to have someone take a certain action, as in *Taro ni tabete moraitai*, and *Taro ni tabete hosii*. In recent years, *Shite-hoshii* has been used more widely, and in most cases this form entails, if any, the case particle *ni*, as illustrated above, to indicate the preposed sense subject (*Taro*) of the verb that follows (*tabete*). However, even though used less frequently, *ga* is used as a substitute for *ni* in the same context, as in *Shizen e no aratana ishiki ga umarete hoshii*.

An investigation has revealed that while *ga* is used to stress the particularity of the sense subject person, more typically, instead of being used with a person, *ga* tends to be used with a sense subject that represents a highly abstract notion, such as organization and way of thinking.

Key Words : *tehoshii*, *ni*, *ga*, sense subject

キーワード：「てほしい」、「に」、「が」、動作主体

【内容】

- 0 問題提起
- 1 現代語の概況
- 2 20世紀の状況
- 3 まとめ

0 問題提起

0.0 要旨

本稿は、現代日本語の「～てほしい」形式において、実際の動作主体を明示するものとして、伝統的な格助詞「に」のほか、格助詞「が」も、一定の制約のもとで使用されていることを指摘する。この「が」は、主たる存在ではないものの、相応の位置を占めていることを確認し、さらに、その背景について考察する。

0.1 問題点

近年、日常の生活、さらに新聞記事あるいは、ラジオ放送から受け止める限り、他者に動作を要求するとき、「～てほしい」形式（以下、「～でほしい」および漢字表記の「欲しい」をも含む）は、共通語として定着していると認めざるを得ない。このことは三井はるみ（2007）が明確にしている。

この場合、一般的に、実際の動作主体は、助詞で明示するならば、「太郎に楽しんでほしい」のように、格助詞「に」が使用されると考えられる。

しかし、動作主体を「が」で明示する例があることについて、以下の1.3.3で述べるが、稿者は、NHKラジオ放送を聞き、新聞を読むことで、「看過できない」と意識するに至った。

以下、意図的ではなく、偶然、耳にした、動作主体が「が」で明示される「～てほしい」形式を示す。いずれも、NHKラジオ第一放送を稿者が文字化したものである。

(1) 親が子どもにしっかりと注意してほしい。

(ローラーシューズ路上滑走の危険警告：発話者は警察 2010. 5. 26 11:16pm)

(2) 「夏休みが早く来てほしい」と書きました。

(小山市の民間行事「人形流し」：発話者は小学生 2010. 7. 4 1:57pm)

(3) (慰霊祭開催を) 受け継いでくれる人が出てほしい。

(1988年の自衛隊潜水艦なだしお事故の23回忌にあたる犠牲者慰霊祭：
発話者は遺族 2010. 7. 4 17:55pm)

(4) これで地元が元気になってほしい。

(口蹄疫感染指定解除宣言：発話者は宮崎県川南町民 2010. 7. 19 0:03am)

このように、「が」と「～てほしい」の共起は、頻繁ではないにせよ、たしかに存在する。

稿者（1946年生まれ、神奈川・東京・埼玉にのみ居住・通学・勤務）は、基本的に、「～てほしい」を使用しない。一般場面では「～てもらいたい」を、敬意場面では「～ていただきたい」「お～いただきたい」を併用する。

そして動作主体を明示するために格助詞を使用するならば、「あなたに担当してもらいたい」「あなたにご担当いただきたいのです」のように「に」のみである。「が」は使用しない。

また、1952年に初めて接した「～てほしい」形式使用者が大阪市出身の中年女性であったため、この「～てほしい」を関西方言としてしか認識できなかった。このことは、周知のごとく、

中村通夫（1957）が「～てほしい」について、第二次世界大戦のため外地に出発する時点（1940年か）では、「関西のコトバだぐらに考えていた」という発言をしていることと一致する。

しかし、翻って想起すれば、1974年発表の『あなた』という曲（作詞・小坂明子、大ヒットしたと記憶している）に、「～てほしい」があり、しかも動作主体を明示する「が」があった。「が」と「～てほしい」の共起は、最近の現象ではないことが分かる。

もしも私が家を建てたなら小さな家を建てたでしょう〈略〉

子犬の横には、あなた、あなた、あなたがいてほしい

以下、「～てほしい」と、実際の動作主体との関連について、考察していく。

0.2 関連事項

近年、他者の動作を「恩恵」と理解することを表す補助動詞「お～いただく」「～いただく」形式においては、動作主体が格助詞「が」で明示されることも多く、容認されている状況である。このことは、金澤裕之（2007）に明らかである。

伝統的には「先生にお読みいただく」のように動作主体は「に」であった。

とすれば、同じく他者の動作に関わる、すなわち動作を求める「～てほしい」の場合は、どのようになっているのか、検討しておく必要がある。

1 現代語の概況

そこで、まず、現代語の概況を観察していく。

以下、稿者のいわゆる「手作業」とデータベース『聞蔵』により、「てほし」の文字列をもつ、「朝日新聞」の例を示す。

1.1 動作主体は明示されるか

動作主体は具体的に表示されないことも多い。日本語では、動作主体はしばしば語としては明示されず、「～てほしい」も例外ではない。

試みに、「朝日新聞」2010年9月7、8、9、10日朝刊の「～てほしい」形式を、手作業により40例抜き出し、動作主体が明示されるか否かによって整理すると、明示12例に対し、非明示が28例で70%に達する。一般的傾向として、場面から推測できることは書かないことが多いといえるのであろう。

非明示の28例のうち2例を示す。

(5) 製材会社やまりん（帯広市）側から〈略〉損害を回復できるよう林野庁に働きかけてほしいと依頼され、98年8月に500万円のわいろを受領した（あっせん収賄）

（一審・二審判決の認定事実：「働きかける」のは鈴木宗男長官 2010.9.9 1面）

(6) 高木はパワーが魅力。寝技もうまく、センスもある。19歳と若い。右の釣り手を取ったらすぐに技をかける積極性を見せてほしい。

(柔道大会「見せる」のは柔道高木海帆選手 2010. 9. 9 20面)

1.2 動作主体と助詞

動作主体は「に」「が」「で」のほか、「も」「は」でもマークされる。

調査範囲で、動作主体が1文中に明示される12例は、「に」4例のほか、「は」2、「も」2、「にも」2、「で」1、「が」1例ずつである。

日常の言語生活からも、「～てほしい」形式において「に」が多いことは容易に推測できる。また、『方言文法全国地図』の調査例文も「あの人には、是非、いっしょに行ってもらいたい」のように「に」である。

現代語では、他者に動作を要求しようとする場合、動作主体を明示するのであれば、「動作主体+に」が基本形式といえる、との見通しが得られよう。

(7) 生んでくれたモンゴル、育ててくれた日本の選手に大いに活躍してほしい。

(柔道世界選手権に際して：発話者横綱白鵬 2010. 9. 9 19面)

(8) これからもより多くの高校生に世界に挑戦してほしい。

(科学五輪について：社説 2010. 9. 7 3面)

次の(9)は、「が」の例である。

(9) 福利厚生という面を考えると、できれば全員が2%以上の結果を残してほしい。

(社員個人による企業年金運用利回り：発話者企業総務担当部長 2010. 9. 8 26面)

次の(10)は、組織が動作主体であることを表す「で」の例と解釈できるだろう。

(10) 密室の取り調べで検察の誘導によって作られた調書が判決で最優先され、それが真実かどうかということを最高裁で明らかにしてほしい。

(鈴木宗男議員受託収賄罪裁判：発話者鈴木宗男議員 2010. 9. 9 35面)

また、「は」が使用されることも、添加の「も」が使用されることもある。

(11) 首相は自信を持って、まずは消費増税に向けた党内の議論を進めてほしい。

(民主代表選：経団連米倉会長 2010. 9. 7 4面)

(12) 政治家は安いギャラでも出演するという。〈略〉テレビ局側もメディアとしての品格を持ってほしい。

(「TV大事議員」国民も反省必要：投書者は医師55歳 2010. 9. 8 14面)

そして「に」に「は」を合わせた「には」がある。

(13) 孫娘には、心から心へ、語り継がれたこの経験を、終戦の8月だけでなくいつも胸に留め置いて命を大切にほしい。

(孫に戦争体験語り継いだ夏：投書者は主婦64歳 2010. 9. 10 14面)

1.3 動作主体を示す助詞

1.1 および 1.2 をうけて、「～てほしい」の実際の動作主体は明示されないことが多い

(上述のサンプルでは70%)が、明示されるとすれば、「に」のほか「で」「が」「は」「も」などが使用されるとの見通しが得られる。

改めて、2010年5月1日から、8月25日までのうちの、合計18日間について、稿者の手作業および『聞蔵』の検索機能を使用して得た「～てほしい」形式のうちの、助詞と共起する158例に、1.2の12例を合わせた170例を整理していく。

「に」 60例	「には」 22例	「にも」 13例	「にこそ」 1例
「で」 1例	「では」 1例		
「が」 26例			
「は」 28例			
「も」 17例			
「こそ」 1例			

1.3.1 「に」の優勢と「で」の存在

多くの場合、「には」「にも」を含めて、「に」が使用される。格助詞を使用するのであれば、「に」が極めて優勢である。また、状況に応じて、「は」「も」が追加された、「には」「にも」の例も多いことが分かる。「に」の単独例60例に、他の助詞と複合する「には」22、「にも」13、「にこそ」1例を合わせると96例に達する。

- (14) セットプレーで1点取って、日本らしく泥臭く勝ってほしい。1点入れたら、守りの強い今野に出てほしい。

(W杯パラグアイ戦：発話者は会社員37歳 2010.6.30 38面)

- (15) 24日の会談で鳩山氏は「菅さんに頑張ってほしいと思っている」と述べ、改めて菅首相を支持することを表明。
(民主党総裁選 2010.8.25 1面)

- (16) 中国には存在感を訴えるより、むしろ〈略〉環境を守ろうというスタンスを貫いてほしい。
(上海万博：社説 2010.5.1 3面)

- (17) 家族のぬくもりを子どもたちにも大切にしてほしい。地味でいいから身の丈の人生を歩んでもらいたい。

(参院選立候補者アンケート：回答者は自民党候補者 2010.7.1 横浜版31面)

また、組織が動作主体となることを表す格助詞「で」は、単独例1(既出(10))、と次の(19)の「では」1例があるが、格助詞「で」は「にて」に由来すると考えられるのであり、「～てほしい」と格助詞「に」の結びつきの度合いは高いといえる。

- (18) (沖縄基地問題について)菅政権ではとらえ直してほしい。

(参院選立候補者アンケート：回答者は民主党候補者 2010.6.29 長野県版28面)

1.3.2 「は」「も」の例

いわゆる「取り立て助詞」の「は」「も」で明示されることもある。

- (19) 選挙で国民が妥当な判断を示せるように、各政党はそれぞれが目指す社会を大いに語ってほしい。

(新党よ、理念を掲げて選挙に：投書者は大学生20歳 2010. 5. 1 16面)

- (20) ぐずる子にてこずっている母親がいたら、近くの人は手を差し伸べてほしい。

(悩める母親にストレスより救いを：投書者は大学非常勤講師39歳 2010. 6. 23 14面)

- (21) 流行の長くゆったりしたマキシ丈スカートを履く女性も注意してほしい。

(行動や格好、見直してみよう：投書者は無職28歳 2010. 6. 29 14面)

1.3.3 「が」の存在

調査範囲の170例中に、格助詞「が」が26例ある。

すでに0.2 関連事項で示したように、「～てほしい」と同じく、他者の動作を恩恵として理解する「～いただく」形式については、金澤裕之(2007)の指摘がある。すなわち、現代語では動作主体を示す格助詞として、伝統的な「に」のほか「が」も許容されつつある。もはや、「先生が教えていただく」は、誤用とは言えなくなっている。

しかし、「～てほしい」については、数字の上で「が」は優勢とはいえない。

とはいえ、170例中の26例は、「は」28例にほぼ近く、無視できる比率ではない。どのような場合に「が」が使用されるのか、点検していく。

ただし、(24)は「その日本全体に」、(25)は「その社民党に」、(27)は、「その菅さんに」が省略されているとも考えられるので、「が」の確例とは見なしえない側面もある。類例は他に数例ある。

- (22) 「〈略〉文学者の中に自然への新たな意識が生まれてほしい」と話す。

(「環境文学」：発話者は日本ペンクラブ会長 中村敦夫 2010. 6. 21 15面)

- (23) 「〈略〉一日も早く安全宣言が出てほしい」と話している。

(口蹄疫予防のため県の育成牧場立ち入り禁止：発話者は施設長
2010. 5. 20 新潟版33面)

- (24) 広島、長崎だけでなく日本全体が一つになって、前に進んでほしい。

(「戦争はだめ」伝えて：発話者は被爆経験者80歳 2010. 8. 22 福井版27面)

- (25) 「社民党が議席を増やして民主党を牽制してほしい」。そんな期待をわき起こしたい。

(参院選党首に聞く：発話者福島瑞穂 「牽制する」のは社民党 2010. 6. 22 4面)

- (26) 心情的には菅さんが久しぶりに世襲じゃない首相だから頑張ってほしい気もするし〈略〉

(参院選@広島 2010. 6. 22 広島版33面)

- (27) 松山校長は「これを機に、子ども自身が安全に対する意識を向上してほしい」と話している。

(「安全」誓いの一文字 豊中・野田小 2010. 6. 23 北摂版29面)

- (28) 「〈略〉だからこそ慰霊の日が戦争のことを思い出す1日になってほしいんです」と宮国さん。

(普天間問題：発話者は那覇市出身者 2010. 6. 24 39面)

(29) 全世界のファンが引き続きW杯を楽しんでほしい。

(誤審で押し問答FIFA「ノーコメント」：発話者は広報担当者用問題
2010. 6. 29 35面)

(30) 鉄建公団訴訟原告団長の酒井直昭さん(62)は「希望する人すべての採用を、JR各社が人道的観点を含めて受け入れてほしい」と訴えた。

(JR不採用問題 2010. 6. 29 37面)

(31) 保育の質の向上のためにも、保育士の労働環境をよくしようという機運が高まってほしいと願っています。

(保育士の労働環境改善を願う：投書者は医師58歳 2010. 6. 30 16面)

1.3.4 現代語の概況の中の「が」

ここまでの観察で、現時点での「～てほしい」形式について、以下の3点が指摘できるであろう。

- ① 実際の動作主体は明示されないことも多い。
- ② 助詞を使用するならば「に」が優勢である。
- ③ 「が」も無視しきれない程度に使用されるといえる。

この中で「が」はいかなる傾向にあるか、整理した結果、以下の4点を指摘したい。ただし、これはあくまでも「傾向」であり、「に」優勢のなかでの、「強力ではない「自己主張」」ともいべきレベルのものと理解すべきである。

- ① 実際の動作主体は抽象的概念であったり、非個人であったりする例が多いのではない。 (22)「意識」、(30)「JR各社」、(31)「機運」など。他にも「政権が」「行政が」「就労へのチャンスが」などがあつた。
- ② また、発話者の期待する状況は、特定あるいは一定範囲の人物の具体的な動作により実現するものではなく、抽象度が高いものである。(3)の場合も「慰霊祭開催を受け継いでくれる人」は、現時点では特定できず、具体性を欠いているのである。
- ③ そのような具体性を欠く状況では、しばしば、説明要素が多くなる。多くの意味を示せる「に」は別機能に使用されることもあろう。その結果、「に」の重複を避けようとすれば、動作主体はしばしば「が」で示されることになる。

すなわち、(1)では「親が子どもにしっかりと注意する」、(22)では「文学者の中に自然への新たな意識が生まれる」、(27)では「子ども自身が安全に対する意識を向上する」、(28)では「慰霊の日が戦争のことを思い出す1日になる」という、「整った」文が前提となっているのである。

ただし、「に」の重複を避けることが最優先され、「が」が使用されるとはいえないであろう。日常の場面では「あなたに8時に来てほしいのです」などは、しばしばあり得る。

- ④ しかし、上記①②③に抵触しない、(29)の「全世界のファンが」のように、「に」であ

っても一向に支障がないような状況で「が」が使用される例も、事実として散見される。「～てほしい」と「が」の共起は、看過すべきではないと考えたい。

2 20世紀の状況

2.1 文学作品の用例

1を通して、現代語を観察する限り、「～てほしい」形式が動作主体を明示するなら、それは、しばしば格助詞「に」と共起すること、そして「が」もある場合には使用されることが確認できた。

この現象はどのような過去をもっているのか、概観しておきたい。

三井はるみ(2007)によれば、作家の場合、「～てほしい」形式への親疎関係の境界は概ね1926年生まれの前後にあるといえる。

また、『日本国語大辞典』第二版には、「～てほしい」の例は17世紀から確認できるが、ここでは、三井はるみに従い、『CD-RM版新潮文庫の100冊』所収の文学作品から、「てほし」および「でほし」「て欲し」「で欲し」の文字連続で検索した結果を示す。

日本人作家67名の作品を検索したが、「～てほしい」形式を検出できない作家もあり、また、1885年代生まれの武者小路実篤が使用する例もある。

最終的に43名の作家と4名の解説から265例を得た。しかし、動作主体が明示される例は多くない。その中で43例(16.2%にあたる)を確認した。内訳は以下のとおりである。

「に」 19例	「にも」 5例	「には」 1例	「で」 1例
「から」 4例	「が」 4例	「は」 6例	「も」 3例

2.1.1 助動詞「に」の優勢

ここでも、「に」が優勢である。単独例のほか、「にも」「には」を加えると25例に及び、半数を占める。ただし、19例の中には疑問例2例がある。すなわち、

(32) 「あなたは私に、あなたの家までその本を持ってきてほしいと要求しているのかしら？」
(村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』1985年)
の場合、「私に」が係っていくのは、「要求している」であろうが、「持ってきてほしい」も完全には排除できず、ひとまず、取りあげた。類例が他に1例ある。

「に」の例を示す。男女、年齢、時代設定などに拘わらず使用される。

(33) 「永野君、君のような男に美沙をもらってほしかったなあ」

(三浦綾子『塩狩峠』1973年)

(34) ティナは一刻でも長く私に居て欲しいので、次々にいろいろの物を運んで来ては見せてくれる。
(藤原正彦『若き数学者のアメリカ』1981年)

(35) 著者はこれとくに若い人に読んでほしいと語られたという。

(石田百合子『新源氏物語』解説1984年)

- (36) 浪右衛門がいったのは、むしろ光秀に逃げてほしいというのが本音だったのかもしれない。
(司馬遼太郎『国盗り物語1971年』)

2.1.2 「で」と「から」

「で」は、個人ではなく、組織に関して使用される。用例(10)、(18)と同じ状況である。

- (37) 大使ミノットらは金角湾側で最も皇宮に近い一帯の城壁を補強する際、ヴェネツィア勢でそれを担当してほしいとの皇帝願ひも、快諾したのである。

(塩野七生『コンスタンチノーブルの陥落』1991年)

また、「から」も、行為の出発・経由点を表すことの延長線として、動作主体を示すことができるが、動作主体を示す以外の側面もあり、参考例とする。

- (参38) 突然悲しい知らせで父や姉を驚かすに忍びない、君から何となく匂わせて予め心構えをさせてやって置いてほしい、と結んでいる。

(小林秀雄『モーツアルトの手紙』1968年)

2.1.3 「が」の例

格助詞「が」の例も確認できる。

ただし、4例中の1例は動作主体ではなく、「袁儂の嶺南からの帰途」と解し得る、所有の「が」であることも考えられる。

- (39) そうして、付加えて言うことに、袁儂が嶺南からの帰途には決してこの途を通らないで欲しい、その時には自分が酔っていて故人を認めずに襲いかかるかもしれないから。

〈略〉

(中島敦『山月記』1942年)

- (40) だが加藤は、その電報が例外であって欲しいと思っていた。

(新田次郎『孤高の人』1969年)

- (41) (作者三浦綾子の胸中の悲願とは) 読者のひとりびとりの胸の中に、永野信夫というこの主人公がいつまでも生きつづけてほしいという願いであった。

(佐古純一郎『塩狩峠』解説1973年)

- (42) これで私の役目は終わった。あとは直接あなたが交渉してほしい。

(沢木耕太郎『一瞬の夏』1981年)

このように、「が」との共起例はすでにある。

1947年生まれの沢木耕太郎は無論、三井はるみが境界線と想定した1926年を多少ながら遡る、1912年生まれの新田次郎や、1919年生まれの佐古純一郎が「が～てほしい」を使用している。考察範囲をさらに拡大する必要があるだろう。

わずかな用例の考察は無意味になりがちだが、あえていうなら、(40)(41)は、特定の個人に具体的な動作を要求するものではない。抽象的、観念的な状況である。

しかし、(42)については、動作主体は「話し相手」であり、具体的な「交渉する」という

動作を求める、一文中に他機能の助詞「に」もない、「に」と置き換えられる「が」である。あえていえば、動詞「交渉する」は、しばしば交渉相手を明示し、「先方と／に」のように「に」の使用も可能である。あるいは、その誤解をさけるための、入念な「に」の回避策の結果としての「が」である可能性はあろう。

いずれにしても、「～てほしい」形式において、動作主体を明示する「が」の使用は、1969年まで遡れる、さらに早い段階から、相応の使用状況にあったことが推測されるに至った。

3 まとめ

考察の結果、「～てほしい」形式と、格助詞「が」の共起は、さほど多くはなく、しかも近年に至って、わずかながら浸透しはじめている、との見通しを得た。

しかし、実態をみれば、一定の範囲にとどまっていることも事実であろう。すなわち、動作主体が組織や抽象概念など、具体性を欠くものであったり、また人物であっても、まだ確定していない、やはり具体性に乏しい要素があったりする。

その具体性の乏しさが、「～が～をする」という、誤解の生じにくい、整った文のかたちを要求することになり、動作主体を明示する「が」の使用につながるのである。

確固たる相手に具体的な行為を要求する、誤解の生じにくい場面・・・その典型は、話し相手に、直接に動作を要求する場合・・・では動作主体を明示することは少なく、明示するとしても「～に～してほしい」が優勢である、また、相応の理由があれば「は」「も」も使用されることを認めたい。

しかし、「～いただく」の場合、伝統的に「に」で明示されていた動作主体が、近年「が」により示されるという事実がある。

今後、「～てほしい」形式でも、実際の動作主体を明示し、かつ、誤解をさけるために説明を詳しくしようとする傾向が強まれば、「が」が選択される可能性はある。

山田昌裕（2010）に詳しいが、日本語史の中で、体言と体言を結ぶ用法の多かった「が」が、動作主体を明示する機能を拡大しつつあることは、否定できないと考えるからである。

今後の推移を観察していきたい。

【参考文献】

- 金澤裕之（2007）「～てくださる」と「～ていただく」について『日本語の研究』第3巻2号
 中村通夫（1957）「みたいだ・てほしい」『NHK国語講座：現代語の傾向』宝文館
 三井はるみ（2007）「要求表現形式「～てほしい」の共通語としての定着」『日本語学』26-11
 山田昌裕（2010）『格助詞「ガ」の通時的考察』ひつじ書房